

# 近代茶道史覚書

蓮見真由美

(第四回生)

## 序

明治時代初頭、茶は著しく衰退した。しかし、この衰退もやがては復興したが、この復興の影にいたのがいわゆる財閥であり、明治に新しく起こった、資本家達である。鈍翁益田孝、箒庵高橋義雄等がその中心となって茶道は復興したのである。

再興された茶道は、いわゆる道具茶が中心である。彼らは名物の類を買いあさり、如何にして、名物を並べた茶会を催すかということに主眼を置いた。いわゆる利休が伝えようとした、わびを根源とし、人の交わりを中心とした真の茶は行なわなくなってきたのである。しかし、このような茶が氾濫する反面茶の家元達は秘伝を大切にし、それを公開せず、依然として閉鎖的かつ封建的であった。この中で、これらの道具中心の茶会や、家元達の閉鎖的かつ封建的な態度を打破しようとして現われたのが、「大日本茶道学会」を創立した、田中仙樵である。

仙樵が主張した、無流儀論、秘伝口伝の開放、茶を理論的に説く、ということとは茶の世界の封建的に対する批判であり、反撥である。また、仙樵は今までに行なわれなかった、通信教育をはじめ、「茶道講義録」なる書物を発行し、それを会員に配布した。

仙樵は、家元制度を批判し、家元を廃して会長とし、初代の会長

には鳥尾得庵をおき自らその主任となった。その故に田中仙樵が創立した「大日本茶道学会」は、近代における唯一の茶道改革機関となったのである。

家元制を廃し、自ら秘伝を出版したことは明治時代の茶の世界において、反逆児に等しかった。故に現在においてさえ、田中仙樵の存在は茶の世界において無視されがちになっているのである。

そこで、私はこの田中仙樵の茶道改革の意義を考える前提として、仙樵がその茶道理論の根底において『南方録』の意義を考察し、ことに『南方録』の中心テーマである曲尺割研究の歩みを回顧することにより、茶道の美学ともいべき曲尺割の性格を考えてみたい。これが本稿の課題である。

## 第一章 『南方録』の成立とその内容』

### 第一節 『南方録』の成立

『南方録』というものを簡略にあらわせば堺の南宗寺塔頭であった集雲庵の南坊宗啓首座が、その茶道の師である千利休に親しく接して、見聞したことを詳細に書き留め、それに利休が奥書したものを、七巻に編成したものである。

第一巻は「覚書」の巻で、利休の茶に対する考えを記したものである。この巻の奥書に南坊宗啓は利休に「右覚書、心得相違も候へ、被仰聞度候、御物語承候度々二書付置候へとも、遇僧の得心不成就候之故、雲泥之事候半敷、殊二書様疎略二候、書改候も亦不本意存候故、此まま進之候、かしく」といつているが、これに対して利休は「右数々之雑談御書留ニ成候而後悔之事敷、併相違之所無之

候、同敷ハ反古張ニ成候へかし、かしく」といって、この巻が世に出ることを憚っている。

第二巻は「会」の巻で、利休の茶会記、約一年間のものを記した巻である。しかし「利休百会記」とは違う、この『南方録』の会記は、茶道具を変えた時だけを記したものらしく、利休は奥書に「右之会共ハ年中ノ毎会之内、品閑たる斗を御書拔候事不心得候、面上ニ御思慮可承候、呉く相替事なく、日々同事斗之内、心之働ハ引替、何様にも可有候、所作、飾、置合ノ珍敷事ハ、不快会にて候」と南坊宗啓に茶会のあり方についての注意を与えている。

第三巻は「棚」の扱いを記したもので、「四疊半、置棚等」という副題がついている。ここに、はじめて曲尺のことが記されている。利休が奥書に「右一覽申候、サテモマメメ敷色々之事共ヲ被書集候」といつているように、総ての棚の道具置合わせがわかるように記してある。

第四巻は「書院」とあり、副題に「書院少々覚書」とある。この巻は、床の間、違い棚書院の飾り方が記されている。

第五巻は「台子」で、この巻は各子の飾り方を利休が南坊宗啓に小切紙に図を書いて与えたものを、南坊宗啓がまとめた巻である。この「台子」の巻は、利休の秘伝を集めたもので、この巻の中に、三ツ折ノ曲尺、七ツ曲尺、五陽六陰の大曲尺が記されている。またこの巻は台子ばかりではなく及第台子、中板等の飾りついても掲載されているが、この巻に対して利休は奥書に「一卷一覽申候、多年之切紙数々御紛失なく御取集候事、道ニ対而之御深切、神妙神妙、相違之儀勿論無之候、然共著及他見候へハ、相伝疎畧ニ成行、心外ニ候まま、願へくハ七花八裂所仰候敷、併貴僧之御鍛煉、書物不入事

ニ候、かしく」と以上のように、利休はこの秘伝が他にもれることを非常に心配している。

以上の五巻が貞享三年に書写されたもので後の二巻は元禄三年に発見し且つ書写されたものである。

第六巻は「墨引」で、主に曲尺割のことを記したものである。これも利休の秘伝であり墨を引いて利休のもとから帰ってきたので「墨引」という。故に利休は手紙に、「巻物六くり返しくり返し被見申候、五巻いづれも奥書判をもらいたし進候、此一巻ニおゐてハ、あまりこまこまニ秘事を被書願候、年月之後他見もいかか、秘ハ秘するニ依て尊く候、是非此巻ハ反古ニ可被成候、申も疎ニ候へとも、我等之方ニもか様之書神々無之候、写留候て子供ニも伝へ度様ニ存候へとも、いかにしても秘事払底ニ及候、とにかくニ丙丁童子かものニ可被成候、かしく」とあり、利休はこの巻には奥書判をおしていない。そして消滅することを希望したが、これに対して南坊宗啓は、「右ノ官ク此巻ニハ奥書モナク、墨引テ文ヲ添テ被申コトナレハ、速ニ状却セント思へトモ、コノ咲物忘ノミ、多年相伝ノコトモホトナクワスレハテシコト口惜ク、他見スヘキモノナラネハ、師ノ命ヲ恐ナカラ、ツタノ中ニ打入置テ、独見ノ一卷トス、真ニ大秘ノ奥秘ナリ、」といいつて、世に残ったのである。

最後の第七巻は、「滅後」といわれ、利休の死後南坊宗啓が利休の教えを思いつくまま記したもので、副題は「覚書」となっている。もちろん利休の奥書はついていない。

しかし、『南方録』は利休の校閲した、そのままだが世に伝えられているのではなく、写本が伝わるのみである。この写本は立花実山が書き写したものである。故に現在流布されている『南方録』はす

べてこの立花実山の写本を最古のものとしている。

『南方録』を写し、それを代々に伝えていった立花実山という人物は、九州筑前黒田藩の藩士で、藩主黒田光之に禄高二千五百石で仕えていた。といい、名は重根、通称名は五郎左衛門といった。法名は実山、宗有といい、而・斎とか来也堂、または松月庵主、才魚堂などといった室号も称していた。

実山は生まれつき極めて英敏で、博学多才であり、詩文にも長じ、和歌は後水尾院より勅点を拝するといった当時としては最高の文化的な教養をもっていた。書、画、彫刻をもよくしたことは勿論である。禅は博多崇福寺の第八十二世で大徳寺江雪宗龍の嗣である、古外宗少和尚に学んでいる。叡山道白を招いて、博多矢倉門に東林寺を創建したのも実山であり、従って叡山との道の交りも頗る深かったと叡山和尚東林寺語録に誌されている。『南方録』を伝えてこれを紹隆し、南方流の祖となった。元禄六年、那珂郡住吉村にある徹書記の旧蹟に松月庵を建て、出家して悠々自適、療病の生活を送ったが讒言によって嘉摩郡鯉田村に謫居、宝永五年（一七〇八年）十一月十日五十四歳で世を去った。

実山が『南方録』を発見した由来は、実山が衣斐了義に宛てた「岐路弁疑」から知ることができる。まず最初の五卷（「覚書」から「台子」まで）を実山が所持した模様を次のように記している。

「南方録我等所持之最初ハ、貞享三年丙寅之秋、光之公御参勤時、貴公（注衣斐了義のこと）、三谷古斉、我等も御供申、船中、蒲刈泊船ノ節、京都何某方より我等へ書状来、利休秘伝茶湯書五卷所持之人有之、密々写取事可成手次有之、大望ならば写て可送之よし」といってこの中の持合わせの抜書きを見せてもらった。しかし

この時は実山は茶はまだ未熟なのでその書がよいかわからなかった。そこで「右之書抜図共ニ、御座船船玉の下にて、貴公へ掛御目候へハ、台子観之図等被感心候而、是ハ珍敷書たるべく候、古斉ニも見せ候へと被申候故、自分船ニ古斉を招、見せ候へハ、同前ニ感申候」と全員の同意見で、書き写してもらうことにした。そして翌年の正月に「桜田御屋鋪我等長屋へ右之書致着之晩、貴公、古斉相招、封ヲ切、三人一同ニ鶏鳴ニ及候迄ニ五札見畢又、殊外可燃書にて候由、其上、土屋宗俊伝ト道筋ひとしく、扱観之子細、露地草庵心持明白ニ相見候、其外俊伝にて不審有之事大方埒明候由」というように彼らは自分達の学んでいる、土屋宗俊伝の茶と比べて研究していった。彼らはこのことによつて南坊宗啓の事がゆかしくなり、彼らは宗啓の子孫を捜しはじめた。すなわち「大阪ニ而便を求、堺南宗寺、今之集雲菴なとくわしく尋候処、宗啓肉族、納屋宗雪とて幽なる隠者、宗啓之古物所持之由聞出、色々申入候へとも、博不行、漸元禄三年庚午年正月廿一日、（此年、光之公御隠居已後始而御参勤也）到大坂着、兼而通達し、同晩、宗雪人來人ニ成、則雲菴道具之内七種相求、さて墨引、滅後、二巻借用、廿二日、三日兩夜夜通し（御持病不快、廿二日より廿四日迄御逗留也）写留置候」ということがみられ、これが最後の書写になったが、この元禄三年がちょうど利休の百年忌にあたる。実山はこのようにして手に入れた写本を非常に大切にした。

「元禄六癸酉六月十七日也、これより已前、貴公、古斉御出之時被申候へ、大切之秘書披見不淺事ニ候、披見をゆるし過分之由、且又他言あるましき由之誓紙可被成由候へとも、貴公、古斉ハ我等之指南者にて候処、誓紙を給候儀、延慮之由御断申候、然共、休、啓

## 第二節 『南方録』の真偽

ニ師之秘奥ニ対し各別之由にて、貴公よりハ元禄六正月十三日、血判之誓紙被下、無抛受用拙者よりも誓紙仕進之置候、古斉も右六月十七日、宗林一紙名書をもいたし、誓紙持参候へとも、右之愚意等申候而、宗林ニハ血判させ、古斉ハ名書計にて召置候」（岐路弁疑より）というように、この写体を実山はいかに大切にし、秘蔵したかがわかる。

しかし、実山も病身になり、『南方録』の写本もこのまま秘蔵して、地に埋めてしまうことを残念に思い、実山はこの写本を書き写すことを許した。これが第一回目の伝授である。このことは、『南方録』の「滅後」の巻の最後に記されている。「喫茶南方録七巻、宝永二乙酉年、寧拙、固本、自得、三菴主、及ビ嗣子虚谷斉主ニ伝ヘテ書写ヲユルセリ」とある。以上の四人は、実山や衣斐了義にゆかりのもので、寧拙は実山の実弟であり、宗樸（宗朴）、廓巖翁ともいい、庵号を半間庵斉号を無華斉と称し、延享二年（一七四五年）十二月十九日に亡くなっている。無華斉は曹洞宗正山道白の命名するところである。

固本ははじめ宗俊伝の茶人であった。黒田藩士、半雲衣斐了義の子である。

自得は、はじめは宗俊伝の茶人であった、大賀宗恩である。

虚谷は実山の嗣子で法諱は道嵩、法号は不白、斉名を虚谷斉と言った。法諱、法号、斉名とも正山道白の命及である。（「正山和尚東林後録」参照）

以上の四人が第一回の伝授者である。そして『南方録』は次々と書き写され現在にいたっている。

現在においては、『南方録』が本当に利休の茶書であるのかどうかは種々の疑問が投げかけられている。最初に疑問視したのは堀口拾巳氏である。氏は南坊宗啓が禅僧であるところに着眼し、「禅僧であった、南坊宗啓の『南方録』などに出る利休の言葉は、相当に禅宗的表現をもっているが、利休の言葉を宗啓自身の禅宗的表現で再現していると考えられる所が少なくないし、また彼が禅僧であるために、利休は特に禅宗的に茶を説いたとも考えられる」（思想二三五号「利休の茶」）

また続いて、桑田忠親氏は、『南方録』を史料的に無視しようとしており、「利休の伝書の中で『南方録』は伝来の比較的正しいものであって、その記事の悉くを疑ふことは余りに偏狭に過ぎることは勿論であろうが、さうかといって、その悉くをその形の儘信用することも早計であって、正確な茶湯の歴史を構成するに際しては、深く考へなければなるまいと思ふ」（「千利休」といっている）。

さらに、小宮豊隆氏は「『南方録』の真偽」（『茶と利休』所収）においてもっと具体的に『南方録』の真偽を検討している。

まず、『南方録』を真書とする理由を箇条書きにしてみると、

①もし偽作だとしても、これほど念入りに手をかけた偽作を創造することができるとするには、よほどの手間も入るし頭も必要である。また多くの共犯者を必要とする。

②自分の偽作したものに、実山ほど尊崇畏敬の情を示しうる人間がそうそう世間にいようとも思はれない。

③もし偽作だとしたら実山は実に、日本の歌舞伎初まって以来の

大作者——もしくは大山師といっている。

④実山の人柄からいって、偽作だと信じ込まれるといふやうなことはないとしても、自分でめのめと偽作するといふやうな人物ではない。

次に偽作とする理由に

- ①納屋宗雪と南坊宗啓との「肉族」の関係が曖昧である。
- ②南方録所持の「京都何某」の名がはっきりしない。
- ③「写し取る」世話をした人の名前もわからない。
- ④現在の流布されているのは実山の写本のみでその原本が現はれない。

⑤福岡にある写しがあり、京都にある原本がない。

⑥福岡の写しが江戸まで来るのであるから、京都にあるという、原本が江戸へ来てしかるべきである。宗雪本も同様である。

⑦利休は人々から大事にされていたのであるから、その珍重すべき本の所有者がなくすような粗末な扱いはしない。

以上が、小宮氏の真偽であるが、これが西山松之助氏になると、疑いのみになる。

西山氏は、実山が記している「岐路弁疑」には一言も『南方録』が千家に伝わることは記していないし、また「墨引」「滅後」も納屋宗雪から借用して筆写したとしているが千家にない秘事だということとはしてない、という点から考えて

①実山が千家に伝わる秘伝書というけれどもその千家に『南方録』は伝わっていない。

②もし伝わっていたのならば、なんらかの伝承があるに違いないと考えられるが、それが無い。

③宗雪の秘蔵書も実山に筆写を売り込むほどのものならば、類書があると思われるのにその痕跡も見あたらない。

④この書は実山写本をもって最古のものとする。

⑤千家本を写したとか、京の某家の所蔵本を写したとか原典の所在が明確でない。

⑥この書が実山の習得してきた黒田藩の先行茶道土屋宗俊の秘伝と符合する点が約七割に及ぶということ。

⑦この書の発掘が奇縁とはいえ利休の百回忌に当たる年に符節を合せて世に出たということ。

以上のような理由をあげ、西山氏は結論として「わたしは立花実山をめぐる土屋宗俊流の俊秀たちが、他流のすぐれた点を補って自己革命を断行したその理論書が、この『南方録』であったのではないかと思うのである」(図説茶道大系「茶の文化史」所収『南方録』は偽書か)

また永島福太郎氏になると、『南方録』を「立花実山をめぐる博多文化人グループの編述」とした控そしてその理由として、『南方録』の書名はもとと総名はなく、古外和尚が「喫茶南方録」と題名されたものと立花家本の五巻に見える。そこで永島氏は「このことから新にな編述書だということがうかがえる。つまり、『南方録』は実山らが編述したもので、利休時代の古書たることを示そうとしたあまり、その真価さえも疑われることになったと言えるのである。」そして「ともかく、『南方録』は利休のおこした茶湯の正道の復興をはかった書物である。実山らは、これを復興ではなく、その再生を主張して、回顧感を秘める編述に努めたのだが、しよせん百年の時代差は蔽えない。そこで疑惑を生んだことは責められるが、

古道の復興ということは達成されるのである。『南方録』は利休・鐵仰の書と言え、まさに使用に堪える。むしろ、将来の発展を期する書物である。ところで、奈良時代に編集された『古事記』『日本書紀』が、わが古道宣明の古典として輝く例も知られる。これとたやすく比較するわけでもないが、『南方録』は茶道の古道の宣明の書として価値づけられる。もとより、『南方録』は、いわゆる評論家の筆にかかる。また、それが大藩の家老をめぐる僧俗グループの知恵だったということも注目される。当代の町人茶湯・武家茶湯を超克する茶道活動の芽ばえとも言えるだろう。(茶の古典所収「利休・鐵仰の書『南方録』」)

以上の諸説をみていくと、『南方録』の信憑性はなくなってくる。現在の地点においては、『南方録』は偽書であるという説の方が強いようである。

### 第三節 『南方録』における曲尺割

『南方録』の成立については、偽点が多いが『南方録』のもっている内容は非常に大切で、なかでも曲尺割は特に茶の美学として必要な意味をもっていると思う。そこでつぎに『南方録』の曲尺割とはどんなものか述べてみたい。

曲尺割とは、道具畳または台子などの上に器物を置くための一定の寸法の割り出し方、道具組みに必要な数の規定、また茶の湯においての初座、後座の陰陽の違いと道具の置き方、また点前をするうえにおいての体の位置動きの規矩をいう。

『南方録』において、曲尺割を中心に多く記されている巻は「墨引」であるが、曲尺割のことがしるされていく順にみていくと、

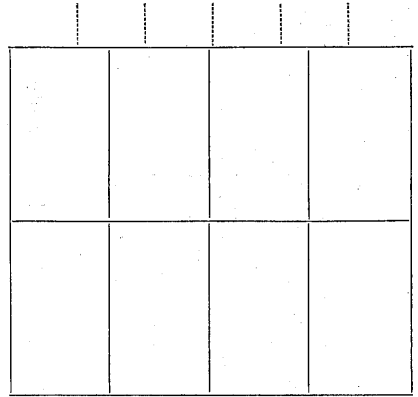
『南方録』にはじめて、曲尺という言葉がでてくるのは、第三巻の「棚」の巻の袋棚のところである。「かねよろづとのひえ、台子及第にもおとらぬ棚也」とあって、この棚に曲尺の秘事がすべてこめられているといっている。この棚の巻に五ツ曲尺と七ツ曲尺の区別がでており、袋棚の置き合わせのところに、「イナカタミ本式」という文がみえ、七ツ曲尺が田舎間に用いられる曲尺ということがわかる。「イナカタミ本式」という意味は、袋棚は田舎畳に用いるのが本式である、ということである。

五ツ曲尺、七ツ曲尺さらに三ツ折の曲尺の区別は第五巻の「台子」の巻でみることができる。そして、この三図は秘伝であり且つむづかしいものとされているらしく、利休は奥書に、「此三ツ之図之内、奥一ツノカネにて数年御執行之台子并小座敷ニ至迄、用并事欠事なく候、能々御分候へく候、猶口伝可申候、穴賢」と記している。

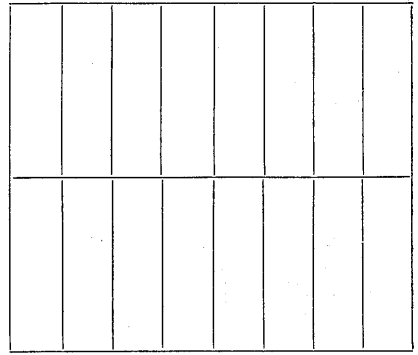
図1は、三ツ折の曲尺といい、本文には「三ツ折ノカネ也、小カネノ大底也、略図也、今時ノ人々、大方コノカネヲ用候ユヘ、相違ノコト出来申候、小カネ大カネ差別ヲ弁ヘサルユヘ也、小カネ座敷ニテハコノ三ツ折也、」と三ツ折の曲尺は七ツ曲尺の根底にあるといっている。

図2は七ツ曲尺といい、本文には「此カネハ右三ツ折ノカネニ間ノカネヲ入タルモノ也、同事ナカラ、コレハ間々大カネト合カネアリ、此故ニ却而差別ナク心得違ル也、コレ小台子ノカネニテ大台子トハ喰チカヒ多シ、」とある。

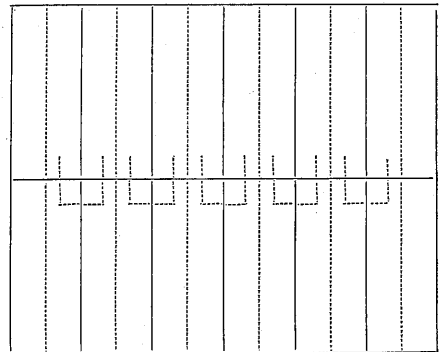
図3は五ツ曲尺といい、本文には「五陽六陰ノ大カネ、大台子ノ本カネ也、可秘々々、此カネ秘事ノ本カネ也、猶口伝有之、」とあ



(図 1)



(図 2)



(図 3)

陽(用)  
陰(体)

る。

右三圖と本文の説明によって、小台子・大台子の区別がはっきりし、またそれによつての曲尺の区別も明瞭になった。また、小台子七ツカネ道具飾無別義の所に「小台子ノ長板イナカ間ニハヨク合也、ソレ故、イナカ衆小台子好マルル尤ノコト也、京間ニ小台子ヲク時ハ、左右疊ノ目ニツツツアルヘシ」と記してあり、小台子は田舎間のみとはいっていない。

さらに『南方録』第六巻「墨引」の巻になると曲尺の事がもっと明瞭になってくる。図3の本文で「五陽六陰ノ大カネ、可秘々々」といっている意味がこの巻で解かれる。「墨引」の最初に陰陽の定め方の説明がある。それは「書院台子、草菴ニ至ルマテ、カネワリノ数ヲ定ルコト、根本何ノカネニ本ヅキテ極メタルコトヲ人皆シラ

ザルガユヘニ、事ニ依テ迷惑スルナリ、凡天地順行ノカネアリ、四季ニ土用ヲ加ヘテ節ヲ五ツニタテ、四方ニ中央ヲ加ヘテ五ツヲ立、一日ヲ辰ヨリ申ノ五時ニワカチ、夜ヲ五更ニワカツ、陰陽五気ニアラワレテ、人モ五ノ体ヲウクル等ノモトツキニテ五ツガネヲ定規トシテ、大モ小モ此カネ違フコトナシ、五ハ陽数ナリ、形ニアラハルルモノハ陽ナリ、此五ツガネノ間々六ヲ、陰ノカネトス本式ニハ陽ノ五ツヲ用テ、六ハ常ニ不用」と以上の如くにして五陽六陰の曲尺は出来たのである。この陰陽は、日本古来から伝えられている天文暦学の陰陽道が根本である。そして「本心の会得ヲ深切ニスレバ、修行ノハカ行テ、間モナク茶ニナルナリ、」と記しているように、曲尺割を会得しなければ本当の茶というものを知ることとはできないが、「終ニカネハナレ、ワザヲ忘レ、心味ノ無味ニ帰スル出世間法

ナリ」と、最後にはカネをはなれることを利休は希望している。

また曲尺割は数においても規定がある、その吉凶のことは次のように記されている。「器ノ数、初座・後座イカガ可仕ヤト尋申ケルニ、台子書院ハ、昼ハカネモ数モ陽ヲ用、夜ハカネモ数モ陰ニテ、アルイハ祝儀、懷旧仏事等、ソレソレ口伝アリ」としてあり、また「初座陰、後座陽ト差別スルコトナレバ、数モ調半ヲ以テ能料簡スベシ、哥、床ハ床座席ハ座席、棚ハ棚、二調一半、二半一調」とあるように、茶の湯の場合初座を簾をかけて茶室を暗くし陰の状態にする、それ故飾りも陰飾りにする。また後座は簾も取りはずし、茶室も明かるくして陽の状態にするそれ故飾りも陽飾りにする。しかし、前に記した歌のように、すべて調、すべて半というのは好ましくない。床と座席を調にしたならば棚は半にする。また座席と棚を半にしたならば床は調にする。というように、二ヶ所同じ数にしたならば一ヶ所は違う数にするという意味である。もちろん調は偶数で凶、半は奇数で吉である。

右の陰陽や数の吉凶をもとにして置合わせた場合、祝儀の時に陰飾りになったり、法事の時に陽飾りになったりして曲尺にあわなくなる時がある。そういう場合に、ツヅキノカネとかククリカネなどを用いる。

また本文に「上段ニ、茶入、ナツメ、茶碗ト、三色ナラビカザリ合セタル時、(中略)陽ノカネニツ陰ヲハサミテ置コト、コレヲツヅキノカネトテ、書院台子ニタビタビ入事ナルユヘ記シヲク也、如此ナルガヨキト云コトニテハナシ、無拠時此心得スベシト云々、」とあり、こういう場合は少なかつたようである。

次にククリカネ三ツを引用してみたいと思う。ククリカネは向炉

の三ツ組と一つ物が二種類ある。

本文に「向爐ノ三ツ組ナリ、向炉ハ水サシ大ブリヲ用ルコト、陽カネニツニカカリテククリカネニ成故ナリ、サレトモ三ツ組ニスルトキハ、如此茶入・茶碗陽カネナルユヘ、水サシチイサクテモツヅキノカネニ成不苦也、カヤウノコト能々分別スベシ」とある。

以上が大体の『南方録』においての曲尺割であるが、この曲尺割は秘伝中の秘伝であるらしく、曲尺割が述べられている箇所では、必らず奥書に他見憚るような意味が書かれている。

## 第二章 『南方録』研究史

### 第一節 近世における研究

江戸時代において、『南方録』が研究されはじめたというのは、元禄三年に実山が『南方録』の全七巻を手に入れ、さらに十六年たった、宝永二年に第一回の写本を許された後のことであるということとは間違いがないであらう。

そこで私は、江戸時代において、『南方録』を問題にしている茶人を二人見出すことができた。

その一人は、青木凡鳥という大阪の茶人である。青木凡鳥は三人いるが、ここで取りあげるのは初代の凡鳥である。しかし、青木凡鳥の一生は詳かでない。

末宗広氏が書いた所の「茶人系譜」には、青木凡麗、号紫雪庵宗鳳・水蓄・一統子、大阪の人、明和二年十二月七日歿、七十六歳、著書「古今茶話」、遠州系の茶人、以上。

また、岡部香塙氏が書いた「点茶玉鑑」の内の「茶人大系譜」に



は、

青木宗鳳、浪華に住し薙髪して凡鳥と名づく、紫雪庵水蒲と号し、又一統子と号す。明和二年十二月歿す。寿七十六。遠州流、以上。

二本とも大体同じであるが、号の所で、水蓄、水蒲の違いが疑問に残るところだが、凡鳥に関してわかるのはここまでである。

本稿で取りあげる青木凡鳥の写本の「喪茶南方録」は、第二章で取りあげた小宮豊隆氏の所持していたものである。小宮豊隆氏はこれを青木本とよんでいる。これは後で述べる浅田妙斎も所持していたものである。

この「喪茶南方録」は、浅野久左衛門という人が「宝暦十三年癸未七月十七日砂原於閑居書写之畢」したものである。故に凡鳥はこれ以前に『南方録』を写したことになる。凡鳥は、明和二年に七十六歳でこの世を去っているから、逆算してみれば、彼は元禄三年に生まれたことになる。全七巻が夷山のもとにはいったのが元禄三年で、第一回の写本が宝永二年で、第二回の写本が享保三年で、故夷山の門人だった、止々斎笠原道桂に許されている。この時凡鳥は二十九歳である。故に凡鳥は世の中に『南方録』が出はじめてから、比較的早く『南方録』と対面することができたのである。

私が問題としたい、曲尺割が主にでている「書院台子墨引」の巻は、小宮氏によると、この巻だけについて、凡鳥は利休の意見を取りあげており、この他の巻はすべて夷山の意見を取りあげているようである。

凡鳥は、本文の次に註日として、そこには本文の説明と、自分の流儀を『南方録』と比較しながら書いている。

例えば、本文に陰陽の吉凶としての飾り方について述べた文に対して

註日

「此書ハ元來に陰陽を出てたる規矩なれハ陰も陽も不用ハ不叶者也、当流ハ陰陽を立るといふ事ハなし、唯陽數ハよき數なれハ陽數をのミ用る事也、

又日陰陽の筋を如此引てハ陰も陽も不用ハ不用叶事也、若陰筋を用る時ハ法事などの時なれてハ用る事なし、則夜会にても陰筋を可用事なれ共夫さハ陽筋を用ると本文にも被記たり、

又日当流の飾方にハ陰陽の筋を不用もし量にかさる時ハ量の目數を客付又ハ縁ちのき方にて陽數を用る也、

棚の上に飾時ハ、台子にても角棚にても二ツ割三ツ割四ツ割を用る也、此の他の規矩ハ不用して飾ハ委く相濟して少も不自由成事ハなし」

以上の引用文からよれば、当時の遠州流の茶はあまり曲尺というものを考えなかったようである。但し陽の數のみ尊重して使っていたようであるが、量を十一や七ツの曲尺に分けて道具を置くということは行なっていなかったようである。最後の言葉にも「此他の規矩ハ不用して飾ハ委く相濟して少も不自由成事ハなし」といっているように陰陽を考えなくても陽數のみで、万事かたづいていたようである。

また、ひとつ物の飾り方がでくる所では風鳥は、自分の流儀には、「ひとつ物」という事はなく、必ず二つを用る。また本文にはこの「ひとつ物」の時は、峯摺りといって、曲尺を摺るということが言われているが、凡鳥はきちんとはかって置いてみたところで、

曲尺は少しずれる。故に別に心して置かなくとも峯摺りになるといつている。

右の文から、凡鳥の『南方録』に対しての態度を見ていくと、彼は遠州系の茶と、利休系の茶とを、客観的に且つ相対的に見ている。凡鳥は『南方録』を茶の聖典としてはみていない。はじめにも「茶道の流儀、今にしては其数、浜真砂のごとしといへども、元来は珠光紹鷗教り出て、中興茶道成就の時に至りては宗及、宗易二流よりわかれて、此二流の外にもる茶道なし。右の二流を以、両の眼、左右の手とす。然其銘々の事をのみいふ計にて善悪を正す事なし。今心見に利休流の秘書南方録を相手としてわち心見る物也」という態度で、凡鳥は『南方録』に接したということを示している。

また最後にも、凡鳥曰として、「利休奥書に秘事を細々と被記とあれとも、茶道の奥秘中是に限る事にあらず」と言っている。そして、「正道の茶にハ元来ハ秘事口伝杯申事一元無事也」ともいっている。これは、後で述べるところの田中仙樵と考えを一つにするものである。

凡鳥の茶道観は、茶道というものは、天下を取る為めにあるのではない、年をとってから身・清浄潔白にして、隠居するために、若い時から学ぶものである。そこではじめて、正道正実の茶というのが成立つのである。というものである。

こういう茶道観のもとで、凡鳥は『南方録』の研究をしたということは大変興味深い点である。また彼の『南方録』に対する態度は、現在の『南方録』研究者達と相通するものがあるように私は思えた。

もう一人の茶人は、幕末に活躍した井伊直弼である。井伊直弼は石川流の片桐宗猿に師事し、後自ら一派を創した。その元になったのが『南方録』である。故に彼の茶は、石川流でありながら、精神的な意味においては千利休から南坊宗啓につながるものである。

「茶湯一会集」などから見ると、直弼は忠実に『南方録』を手本にしている。このような所は、青木凡鳥と相反するものである。しかし、私が今ここで問題とした曲尺割の事を記したと思われる「浜の真砂」「身之曲尺手続之書」など手本にはないので、井伊直弼の曲尺割に対する考え、及び態度を知ることにはできない。ただ、「茶道一会集」から、いかに井伊直弼が利休の茶の思想に感銘を抱いたかを知ることができる。

## 第二節 野崎兎園と四段の曲尺

明治時代にはいつてからの『南方録』及び曲尺割の研究のはじめは、野崎兎園である。

野崎兎園の一生は、兎園の門人である、佐藤虎竹が著わした、「観山亭兎園翁行状」から知ることができる。それによると「兎園翁姓は野崎、名は又七郎、諱して隆政と云う。天保七年四月二十八日を以て、土佐国安芸郡馬の上村に生る。家世々農を業とす得。」とある。しかし、兎園が学を修める時は「時俗濫味、民は依らしむべし知らむ可からずの藩政に訓致し、只鎌鋏の業を修むるを以て能事了れりとなす。」というように、兎園は学ぶべき師をもたなかった。

しかし幸いなことに四書を持っている人がおり、それを兎園は借りて、幼時の時に習字を学んだ医師について素読を習った。この勉学は深夜まで続いて行なったので、両親は喜ばなかった。当時は「読

書は反て家を破り、身を濯す」(観山亭行状より) 基とした風潮があった故である。そこで両親は「其書読むを見れば、故らに業務を吩咐して務めて之れを阻止す。」というようにしたため、兎園はやむをえずこの勉強をやめた。しかし「年十八、選ばれて村の納所となる。其手当を受け、首めて四書俚諺鈔を購述し、閑暇必らず之れを手にす。翁又詞藻あり和歌を好む。藩老五藤氏の臣、五藤弥太夫を師とし、国語及び和歌を学び、又藩士、前田及松本引蔭に詣り、歌詠の添削を仰ぐ。其友四五輩相和するものあり。与に共に往来し、心を歌道に潜め、稿積て数千に至る。」というように一旦挫折したが、それにもめげず自分の才能を発揮しだした。そして兎園は財産を持つ決心をし、ついに「慶応三年、郷土職を購ひ、士格に列す。」また、「明治九年地租改正あるに当り、翁選ばれて詮評惣代となり、兼て其大区の副取締を勤む。同十二年安芸郡食禄の士相謀て、政府の許可を稟け第百二十国立銀行を大阪に起す。翁其取締役となり、専ら高知支店の事務を宰轄す。」そして、明治十五年にこの任務をやめて、隠居に入る、四十七歳であった。これから彼の茶の修行がはじまる。「観山亭行状」には「郷里に帰り、情を山水の間に馳せ、桜樹を東山に植え、亭を築て之に嚮い、自ら号して園山亭とす。時に旧藩主の茶道たりし、上村如山大に同好の士を誘い、茶道を教ゆ。」とある。兎園は明治十八年に、如山のもと高知に行き

毎日如山の所を訪れて茶を学び、一年してまた郷里に戻ってきた。彼は茶に深く感銘し、「茶事を修むるもの、皆其拳止閑雅にして、且つ事に処する従容迫らざるを見て、茶道は大いに精神的修養に効あるを思い、人世必須の業となし、」(「観山亭行状」より) といつて老若となく茶道に勧誘して、上村如山を紹介しその門下にした。ま

た、兎園は点茶を日課とし、三日の日を定めて毎月三回、同志を集めて茶の話をし、また月並会を設けて茶の湯を催した。そして「会畢れば主客応酬、適否を相評す。紅塵眩濛の間、別に仙境の新機軸を開き、其地方、一時茶道の隆盛を見る。」ほどであった。そして「同廿一年、如山の允可を受け、如山贈るに、松平太玄候書する所、観山亭の扁額を以てす。額本如山の父、如石其師宗の茶席に翁て、太玄候に請い得る所なり。翁大に悦び、其号園山亭を廃し、改めて観山亭と号す。」(「観山亭行状」より)

それから兎園はますます茶に深く入り、諸流の茶書を求めた。「日夕之れを写す。必らず自筆を執る故に、概ね其要を暗記す。刻苦多年、古書記する所の淵源を斟み、綜合して遂に、曲尺割の真義を開明し、茶道玉の緒、縦横五則弁、茶道古式原理考等の諸書を著はし、久廐の秘趣を開く。」そして明治二十五年浅田妙々齋が兎園の門下に入る。そして上村如山が死に、如山の門弟は弟子を集めはじめた、そして兎園が大阪で茶を行なっていることが有名になり、京都・大阪・愛媛・香川・広島・新潟等から弟子は集まった。そのころの状態については、「明治四十一年二月十三日、茶友門人衆は集り茶を点ず、翁席に臨み一碗を啖す、俄かにして不例を感ず、是に於て医を呼び藥を勧む。病大に退く。医の曰く胃腸微恙あり、数日の後全快す可しと、皆之を聞き大に安ずるの色あり。寝を離れずと雖も、談笑平日と異らず、家人亦以て意を為さず、十九日の夕、病遽かに華る。廿日午前溘焉終に瞑す。歳七十有三、四男三女あり、晩年其末男を失う。皆翁の喪に服す。」(「観山亭行状」より) と記されている。

兎園の茶道観は「翁固より儉素、勉て奢侈を遠ざけ、器具の如き

も、専ら意を雅趣の適否に留め、徒に珍奇を弄し、佗の精神に違うを戒む。或は翁を嘲て曰く、茶人は奇物を む。苦慮偏側の器を率めて之を玩ぶ、何ぞ其陋なるやと、翁応て曰く。茶道は正なり、凡て手を挙げ足を動かす、皆本度あり、況んや器具の配置に至ては、儼然と陰陽曲尺に合はざるべからず。故に之に向うものは、誠意、正心・而して後正し、体正うして而して後、挙止始て其所を得る。点茶の際、若し一点の他意ありて、誠意を欠かんか、直に之を其挙止に表白して、秘毫も郷すことなし。故に茶道は意を誠にし、心を正うし、其独を慎む時、君子の道に適するものなり。器物の如き、適々俗眼たりすれば、或は苦窳のものあらんも、是れ其器容力勢を示し、元氣を保たしめんが為め、故らに之を製したるものにして、皆偶然に非ずと」(「観山亭行状」より) というように佗びを根源としている。

兎園が曲尺割を研究した上で、一番重要なことは、四段の曲尺を発見(発明ともいえる)したことである。何故発明ともいえるかという、彼は四段の曲尺はあくまでも、能阿弥の発明だとしている。「陰陽の曲尺天地順行ノ曲尺杯ノ名称ノ変ハ初ヨリ唱来リシカ能阿弥台子の寸法定シヨリ名付シカ知ヘカラス量ノ縁双方一寸寸定メ台子習方四段ノ曲尺を設シハ能阿弥ノ発明ナル変明也」(「茶道玉の緒」より) というようにいつているが、これは兎園作身が考えたように思われる。というのは、この四段の曲尺は、『南方録』には掲載されていない。

四段の曲尺とは、京間・田舎間の量をそれぞれ、大台子と小台子で四つに割って、先のほうから、一段(台子の座)・二段(道具扱いの座)・三段(居座)・残り四段という割である。これを図で示す

と左図(図1・図2)のようになる。

(図1)

コノ間二寸ヘリノ割	
コノ間一寸五分屏風の座有余	コノ間一寸五分屏風の座有余
コノ間一寸居座ヨリクリマス	コノ間一寸居座ヨリクリマス
此幅一尺四寸	此幅一尺四寸
台子ノ座	台子ヨリ向ノ
アキ四寸五分	アキ四寸五分
此線一寸四寸ハ	此線一寸四寸ハ
テ道具扱の座	テ道具扱の座
此線台子の界	此線台子の界
向ヨリ二尺八寸五分	向ヨリ二尺八寸五分
幅上同	幅上同
上同	上同
上同	上同
コノ間五分有余ノワリ	
コノ間二寸ヘリノ割	

(図2)

コノ間一寸五分ヘリノワリ	
コノ間一寸五分屏風の座有余	コノ間一寸五分屏風の座有余
コノ間一寸五分屏風の座有余	コノ間一寸五分屏風の座有余
此幅一尺三寸	此幅一尺三寸
向ヨリ一尺七寸五分	向ヨリ一尺七寸五分
此線台目ノ界	此線台目ノ界
幅上同	幅上同
上同	上同
上同	上同
コノ間一寸五分ヘリノワリ	

図1は大台子置方四段の曲尺といい京間の割である。「台子置方図」如ク毫末モ違フ夏ナシ、猶台目切の割合委細云へリ、引合見ルヘシ、実ニ茶道ノ極秘口授、能阿弥ヨリノ定法也、」(「茶道玉の緒」より)とある。

図2は小台子置方四段之曲尺といい田舎間の割である。「小台子置方四段ノ曲尺ハ居座の方ヨリ一寸五分積リ入ルニヨリ、大量ノ割合ヨリ五分下リ居住此割自然ノ曲尺也。」(「茶道玉の緒」より)とある。

以上が四段の曲尺の図解とその説明であるが、兎園は四段の曲尺ばかりでなく、茶のごとくは能阿弥を祖としているという説をもっている。つぎのように(「前略」)後世珠光を茶祖とし、能阿弥に始まる事を知らず、勿論珠光も佗茶創業なれば佗の開祖にて、紹鷗利休は、草庵の開祖也。何れ先なる事、諸書に残れるを挙て、後世の疑を解き、茶道三派の訳を述べん。南坊本録七、滅後の巻に、利休宗啓に語つて、此思案解け難き子細あり能相の伝授の末珠光紹の弟子熟不熟如何程もあり云々。茶話指月集の序に、贈相国喜山公、真能が伝を得玉ひしより以来、珠光紹鷗に委しく云々。(後略)「(「古式原理考」より) 兎園はこの他にもまだいろいろと例をあげて、能阿弥を茶の祖としている。この考えは、兎園の茶を見るに依いての根本的思想である。

また兎園は、曲尺の割出し方にはいろいろと工夫している。「茶道古式原理考」には、陰暦は一年が三百五十四日ある。それを經に十二ヶ月を緯にしてそれを割ると、一ヶ月は二十九日半になる。その二十九日半を寸尺に直して二尺九寸五分、これが台子の横の長さになる。これは、京間の畳の幅の長さにもつながるが、この二尺九

寸五分は縁の分が入っていない。縁の割り出しには、十二ヶ月を大曲尺の六(五陽六陰の六)で割ると二とでる。この二を左右に一寸宛あてて縁となる。故に二尺九寸五分たすことの二寸で、京間畳の幅三尺一寸五分という寸法ができる。

以上のように、台子の長さや、畳の幅を割り出しているが、いささかこじつけの感じがする。兎園は全てにおいてこのようなこじつけの割り出しの方法を用いたようである。また、曲尺の一つ分が四寸九分であるという説明は、四寸の四と、九分の九と掛け合わせて、四九の三十六となる、ということは、一年三百六十日の意味であるとも説いている。

この割り出し方法に対して、兎園の弟子である浅田妙々斎は兎園宛の手紙のなかで批評している。しかも、妙々斎は「折角四段の割御見出し有之事も、却て此一部に至り、劣き事に相成遺憾此事に被存候」とまでいっている。とはいえ、兎園は近代においての曲尺制研究者の嚆的存在であるといえよう。

### 第三節 浅田妙々斎と五奇四偶の曲尺

野崎兎園の曲尺割研究の継承者である浅田宗恭は名を恭卿、号を妙々斎・高林斎・春慶庵という。和歌山の土族の生まれで、砲兵大尉で退いた。

彼ははじめ、和歌山市に於て翠雲舎奇柳(故山本柳得)に就き、花道美笑流と茶道千家の表流を学んだ。後ち、煎茶に移る。彼はこの時玉露製茶売を思い立ち、和歌山市本町三丁目東右軒に於て商う。これは、和歌山表に玉露製茶を商うはじめである。しかしこれは維新前となって中止した。

明治十八年から大阪に移り、石州流の井上宗玄春安の弟子となる。もっと茶を深く学びたいがために、千祿々齋宗匠に寄宿門人になりたく依頼すると、当時は寄宿門人をおいていないとのことと断わられ、つづいて宗玄の弟子におさまり、宗玄が明治二十五年二月二十日に世を去るまで、通い続けた。

明治二十五年二月二十八日、紫野芳春院の広州和尚を訪れ、後ち広州和尚から、高林齋宗恭、別号妙々齋を授与せられた。

その年の五月に、野崎兎園の名を聞いて訪れ、兎園の曲尺割論を聞かされ、妙々齋もこの時から曲尺割を研究するにいたった。明治二十六年四月、兎園より茶道伝授尚奥儀徹底印可証を授けられた。

右のように妙々齋は、兎園にめぐりあいその曲尺割の研究の道を開かれた。そして自ら『南方録』を手に入れて研究を積み重ね、その研究は、大正三年四月六日に八十一歳で死ぬまで、生涯続けた。

彼は曲尺割の研究の結果、あいの間における「五奇四偶」の曲尺を発明した。畳には京間、田舎間、あいの間と三種類に分けることができる。京間とは、京都を中心とする畿内地方の畳で、柱内規六尺三寸（内規法）である。田舎間とは、東京を中心とする関東地方の畳で柱心間六尺（真丈法）である。通常は五尺八寸といわれている。あいの間とは、中京地方で専ら用いられる六尺一間の畳である。『南方録』などには、京間、田舎間の曲尺は載っているが、あいの間の曲尺はでていない。故に妙々齋はこのあいの間にあう曲尺を発明したのである。

「五奇四偶」の曲尺とは、あいの間の畳の寸法で四畳半席は一間半四囲、則三百六十寸である。故に一畳の周囲は百八十寸で、尺八

の十倍である。また畳の両縁を合わせて、一寸八分でこれは尺八の十分一である。半畳は百二十寸で、三百六十寸の三分一、故に鍵畳も同寸になる。故に、台子の幅は一尺三寸五分、風炉の座を炉に移し、一尺三寸五分、此周囲が五十四寸になる。故に居座に於ての身構えは、膝を五十四度に開くのである。

この曲尺を用いる時のそれぞれの道具寸法は、

畳 縦 六尺 横 三尺 縁 九分宛

台子縦 二尺八寸二分

横 一尺三寸五分

地板 一寸五分

天板 六分

高さ 二尺二寸二分

柱太さ 九分

屏風厚さ 九分

高さ二尺七寸

台子向明き 四寸五分 慶事祝賀

台子向明き 五寸四分 仏事懷旧

台子は自由なる故有余三分下へ廻す

囲炉裏向板 二寸一分

以上が五奇四偶の曲尺の説明であるが、妙々齋は野崎兎園の間で、明治三十四年十二月に「茶道規矩新説奇偶書」という本にして発表した。この中で「陽及奇の曲尺は吉陰及偶の曲尺は凶也、今奇偶九つ曲尺の奇は陰曆の天赦日と等しきものにて、則天赦日は春戌寅奇の（五の三）、夏甲午（一の七）、秋戊申（五の九）、冬甲子（一の一）に万よしといふありて奇の十字を吉と知らるへし」というよ

うに、この曲尺が如何に四季五行という曲尺の割り出しの根本にもとづいているか、ということの説明し、且つこの曲尺が正当であると論じている。

妙々齋は曲尺を研究すると共に、茶室の方の畳の敷き方などの研究もした。彼はその研究の結果、大徳寺の真珠庵の庭玉軒の台目席がよく曲尺にあっていることを発見すると共に、その畳の敷き方が、胴抜きになっていることも発見した。彼はいろいろと運動をしたあげく、終には正当な畳の敷き方に変えさせ現在の庭玉軒のごとくになった。これは妙々齋の功績によるところである。

#### 第四節 柴山不言と曲尺割研究

田中仙樵の曲尺割研究の継承者である柴山不言は、名を準行、恬静庵不言と号した。尾張徳川家の旧臣で、ニコライ堂の神父である。生年は定かではない。

不言の茶の修業は田中仙樵に宛てた、明治四十四年十二月十七日付の手紙で知ることができる。「早速御返書被下殊に懇々の御示教千万忝く奉謝上候。以御陰一切明解感謝の至に奉存候。実は小生幼時には当地茶人にて吉田米亭の妻心月に久田流少々学び、ソノ後山本洞伝と申当藩数寄屋頭に有楽を少々学び、後月の家と申老宗匠に裏流を学び候も、何れも質問に對し不得要領の答弁多く、ソノ原ナトヲ説明いたし呉候事ハ更に無之、且同一質疑を二、三回も重又レバ、ソノ都度答弁に相違を生じ、甚不信用と相成（或は小生の驕傲ニアルカモ計難）候に付、遂に表流に入り、柴田宗茂と申ス人に就き相学び候処（今は故人なり）此人は余り学識は無之も頗ル正直の人にて、殊に茶論には至て確實ナル意見も持し居候ニ付、此人に就

て大抵の事は学び、遂ニ表千家（就く事に相成申候。以下略）（日本之茶道所収「柴山不言翁の思ひ出」より）というように不言は茶を修行したが、名古屋は茶の流行地であるにもかかわらず、一人も茶を語る相手がない、また余りの俗茶に愛想をつかしていたところに、田中仙樵の著述を読み、はじめて茶を語る茶人がいたことを知り、明治四十四年に仙樵のもとを不言は訪れたのである。そして、この時から不言は『南方録』における曲尺割を研究しはじめたのである。そこで不言は、曲尺割研究の第一歩として、仙樵から『南方録』や兔園の著時である、「茶道玉の緒」「茶道古式原理考」「茶道縦横五則弁」などの本を借りて研究をはじめた。

不言は研究が進むにつれ、いろいろと先般の研究者の批判もした。仙樵宛の手紙の中にも、兔園の『南方録』の研究がなければこのように『南方録』とじっくり対面することがなかったであろうという点においては、兔園を尊敬するが、「先師之意ヲ一層完全せしむる為めには飽迄ソノ説を訂すは却て先師に對して忠ナル意と信シ候」といって、兔園・仙樵の説を覆しはじめた。

しかし、仙樵はこの曲尺割の弟子が何と言おうと、また意見の食い違いから喧嘩になろうとも、曲尺割の自分の継承者であることを喜んだ。また、不言はこの世で『南方録』を真に読めるのは、兔園が死んで後、妙々齋・仙樵・不言の三人しか存在しないということを確かめ、ますます研究にはげんだ。

不言と仙樵の曲尺割研究における手紙の往復は枚挙にいとまない、莫大なものである。その莫大なものを不言は「南坊録註解」という書物にまとめた。

この書物の緒言に、不言がこの書物を出した動機が書かれてい

る。それには「(前略)現時世上に行わる茶道に原則なく、定理なく全く迷謬に墮落して紊乱ノ極に至り、猶且之を匡濟する者なきに至れる状態なるは全く此書の如き真理秘諦の世に公ならざるに因るなり。此時に當りて蹶起以て真道を闡明し、鼓吹し世の惰眠を覚醒して斯道の復古を謀らざれば後世遂に其奥理を失ふて斯道全く滅亡に帰するを免れざるべし、故に道を奉する者の義務使命として此書の精髓を世に紹介し、其久しく隠れたるを顕はさざる可からざる事今日の急務なるを覚ゆ(後略)」というように不言は『南方録』が世間にあまり伝わっていないことを憂いて、如何にして『南方録』を世に広めようかと努力した一人である。

後世この「南方録註解」を手に入れ読んだ数江教一氏は、「実に精緻な研究であり、その解釈はまことに穩当です。すこしのこじつけもありません。この大著のおかげで、従来不明であったカネワリのこと、いろいろはつきりしてまいりました。」(利休の美学)——南方録のカネワリを中心に——といっているように、不言の研究の程度がわかる。

仙樵は、昭和十二年不言が死去したことを嘆き、その年の「日本之茶道」の十月号に「柴山不言翁の思い出」という随筆を書いている。その一番最後に、「柴山準行氏とは抑も明治四十四年、予に入門の始めから今年の昇天の最後迄能き友達であった。生前に一つ、四ツに組んだまま其の勝敗の決せぬ儘になつて居る重大問題があったが、終に永久此の疑問は予もこの世に遺して行くであらう。斯くして世間を見渡す時既に南方録を茲迄研究して呉れた知己は無い。兎園翁逝き、妙々斎逝き、今又柴山準行氏逝く、遂に遠からず吾れも逝くらん」と大変不言の死を嘆き悲しんでいる。

不言が死んだ後、明治大正における『南方録』研究者は仙樵のみになってしまったのである。

その仙樵の『南方録』及びその曲尺割の研究とは、どのようなものであったか、次に述べてみたい。

### 第三章 田中仙樵と大日本茶道学会

#### 第一節 田中仙樵の一生

明治八年九月三日、田中仙樵は京都府天田郡西中筋村字興(現在の福知山)で大庄家の長男として生まれた。父は喜間太、母は八百恵という。

仙樵は名を鼎(かなえ)、諱を孝篤、号を三徳庵、仙樵、仙翁、宗鼎といい、その他に玄妙斎、仁山亭、茶楽斎、清風庵、知水亭主人・山陰道士、達磨堂、文軒、昇天斎一旭(この号は手品の時に用いる)がある。それぞれ随筆などの時に応じて用いている。

仙樵の父喜間太は名を孝訓といい、幼名嘉次郎、襲名して仁左衛門(田中家代々の当主がつく名)を名のつた。号は翁山、興卯山人・翠竹山人などある。弘化元年に生まれ、明治二十八年八月四日、五十歳でこの世を去った。

大変な多趣味で、絵画、漢詩、書道、和歌、囲碁、造庭術、盆栽、生花、謡曲、擊剣などまことに豊富であった。仙樵の茶や他の趣味もこの父の影響が多分にあつたであらう。

母の八百恵は、近江国何鹿郡佐賀村の片岡の出身である。明治二年二月、十六歳の時に田中家に嫁いできた。

田中家の先祖は宇多天皇にはじまり、敦実親王より系統を引い



て、佐々木盛綱、高綱などを経て、数十世の後、佐々木近江守高信に至り、其孫佐々木四郎左衛門氏綱の代、故あって民間に下り、江州野州郡田中邑に住して田中と姓を改む。夫より数代を経て、田中正之助武照に至りて、大和郡山に移り、其後丹波に転住す。中興の祖、田中門太夫武勇にして、大阪陣に戦功あり、福地山を恩賞として賜わり、爾來連綿として喜間太に至っている。

仙樵は明治十五年に尋常高等小学校に入学し、明治二十一年から家を離れて学校教育を受けた。故に高等小学校卒業迄は福地山町の西垣堯民の漢籍塾に寄宿して居た。「国史略」とか「十八史略」などの素読を受けた。明治二十三年尋常高等小学校を卒業する。翌年、父喜間太が京都の新島襄と懇意であつたので同志社に入つたが、新島襄が死去すると共に郷里に帰つた。そして、但馬の儒者の習田雪峰の塾へ寄宿した。仙樵の漢学と詩文の素養はこの時に養われた。習田雪峰は生前勝海舟とも交遊し、藤沢南岳に素読を受け、死後明治天皇より大儒としての贈位の御沙汰を拝している。

さきにも述べたように、仙樵は父の趣味がひろく、いろいろな文人との交流もあり、彼らの影響によつて、茶に興味を抱くようになった。尙八歳の時、福知山に茶の好きなうどん屋の主人で、田中佐兵衛という人がおり、その人に茶の手ほどきをうけた。のち田中佐兵衛は、仙樵の弟子となる。

茶に上達した仙樵は、やがて佐兵衛の手におえなくなり、佐兵衛の師であり、当時三丹（丹波、丹後、但馬）一の茶人といわれた、大村日迨を紹介され、月二回ずつ、宮津から人力車で迎えられ、一週間滞在して教えをうけ、二年間で日迨所修のすべてを授けられた。そして日迨からは行の行台子、許状は、丹能斎宗匠から盆点ま

でうけることができた。日迨は仙樵に京都に出て本格的な茶の修業をするよう勧めた。そこで二十一歳の時、玄々斎門下の三羽鳥とたたわれた前田瑞雪のもとに業舛修業に入った。

当時、前田瑞雪は、玄々斎、又妙斎、円能斎と千家の裏流三代の家に渡る茶人で、千家の最古老として、千家の伝の称を与えられている。瑞雪の茶は、宗旦流茶道を実地に行ない、屋敷は玄関が利休堂の天井を模しており、接続して、今日庵を建て、八畳敷に寒雲亭があり、四畳半は又隠というように、ことごとく千家を模造している。大正十三年十一月十七日、自宅の今日庵において、八十二歳で世を去つた。仙樵は後に、瑞雪を懐古して「仙樵の今日ある、此恩師の錐錐に依るが故のみ」といつているように、仙樵の茶はこの瑞雪のもとで形成されたのである。

仙樵は瑞雪のもとで、茶の点前はもとより炭挽き、灰作り、茶挽きまで、徹底的に稽古を積み重ねた。

瑞雪のもとをたん離れ、郷里にもどり、また京都に帰り、今度は高台寺にある玉雲院に居を構えた。ここからまた瑞雪のもとへ通い、ついには円能斎宗匠より真台子十二伝の奥秘を伝授された。

明治三十年に、滝染夫人（待月）と結婚。この年は豊太閤の三百年祭の茶会があつた。その茶会があまりにもお祭的であることを仙樵は嘆き、その嘆きを高台寺の下の一得庵（鳥尾小弥太將軍の別荘）に居る茶人、堀籠屋氏に漏らしたところ、彼は仙樵に茶と禅は相通ずるところがある、現在の茶はその禅的なものを欠いているため、茶会といえど道具中心の祭的なものになる。ということを読み、仙樵に禅を学ぶよう勧め、建仁寺の管長である竹田黙雷禪師を紹介した。仙樵はこの竹田黙雷禪師から居士号を与えられ、悟後の修業も

怠ることなくせよといわれ、参禅は四十年間続いた。また、堀龍屋氏に紹介され、鳥尾得庵（鳥尾將軍の事）とも親しくなった。

鳥尾得庵は禅を深く学んでおり、「玉椿」（明治三十七年）という書物も出した。また茶も深く、「菊溪一流茶道条規」を著わした。

仙樵はこのような人々に囲まれ、彼らの勧めと、自らの意志によって、明治三十一年二十三歳の時に高台寺玉雲院において、「大日本茶道学会」の看板を掲げた。仙樵は、「茶道本来無流儀論」「秘伝口伝開放」「茶は理論的であれ」などの説をもって、茶道の改革をおこしたのである。彼はいわゆる茶の世界においての暗黙の掟を破ったのである。故に彼は千家へ破門を願ひでた。そう方がもっと自由に分の運動を進めることができるからである。しかし、千家は仙樵から経済的な面において多大の恩恵を受けており、また虎を野に放つと同じことになるため、何回破門を申し出ても円能斎は「幾度御申越相成候共、破門の儀は平に御容赦被下度」といって、なかなか許してはもらえなかったようである。しかし点茶法は勝手に改める、秘伝開放主義も実行するという暗黙の許可を得ていた。後自然と破門した形になったのである。

明治三十四年の夏頃浅田妙々斎が高台寺の玉雲院に訪れて仙樵に曲尺割を説いた。仙樵は自分の茶の研究の浅さに気づき、また家から茶をこのまま続けるなら仕送りはしない、但し学校に行くのなら仕送りをするということを知田雪峰を通じて忠告してきた。また、「大日本茶道学会」を京都で再興したところで京都には、表千家、裏千家、武者小路千家、藪の内、速水流などの各流の家元が割拠しており、また秘伝公開をモットーにして通信教授を主とした教授の方法をしたので風あたりがきびしい、そして各流流儀の人が多すぎ

て茶道学会の入る余地がない、また通信教授を行なうには、東京の方が通信が発達しているといういろいろな点が重なって仙樵は上京したのである。

仙樵は明治法律学校（現在の明治大学）へ入学したが、茶は断念したわけではなく、浅田妙々斎から紹介してもらった野崎菟園から手紙で曲尺割の事を師事した。明治法律学校を卒業し、日本大学高等専攻科に入学し、明治三十九年に卒業した。その前年に、「茶禅一味」を神田の光融館から発行している。

このように茶に熱中した仙樵は、とうとう家を潰し、また醬油醸造にも手を染めて失敗し、無一文になった。仙樵の子供達は、それぞれの親戚にあずけて、仙樵は浅草の養白寺に間借りした。明治四十三年、この養白寺で再び「大日本茶道学会」の看板を掲げたが、この時は一文無しだったので、浅草の雷門の辺で「フレノロジー」（骨相術）の引札をまいて、人相見をした。（仙樵は骨相学の方も勉強しており、明治三十八年に「西洋骨相術自在」を神田の大学館から発行している）以上のようにして食をつなぎ、再び「茶道構義録」を発行するにいたり、徐々に入門者が増えていった。

大正五年に、本郷曙町、大正十二年には小石川の関口町の鳥尾邸、昭和六年に、下谷の谷中坂町、昭和十三年に現在の四谷左門町に転居した。昭和二十年の五月二十六日、空襲によって左門町の建造物のすべては壊滅した。そして昭和二十四年まで壕舎生活が続いた。新築の家に住むことが全く不可能ではなかったであろうが、これは本当の侘茶はここからはじまるという仙樵の茶道思想から行なわれたことである。そして昭和三十五年十月六日の朝六時五十分には膀胱炎で死去した。八十六歳であった。仙樵の茶についての情熱は

激しく、それを後世にのこすため、死ぬ前日まで筆をとっていたということである。

## 第二節 大日本茶道学会の趣旨

「大日本茶道学会」を起こした理由は簡単に言えば「茶の民衆化」である。その内容を分析すると、茶の無流儀論であり、秘伝口伝開放であり、茶を理論的に説くということである。仙樵が「大日本茶道学会」を創立した時に、「大日本茶道学会設立旨趣書」というものを書いてゐる。これは「抑我國之茶道者始、千珠光・中興・千紹・大成立・千利休・逐以至、成一種之國粹の道学、矣。本来茶道、深味也。起、自禪資、理於易、定二禮於曲禮、夫然而大之、則涉六合、而不レ可ニ盡窮、小之、則為二修身齊家治國平天下之基、豈不復廣大一哉。然而星移物換、茶道之弊、有名無實化、成二種遊芸、為二婦女子之所、翫弄、熟視、今之茶人者、往々蒐集古器物、以誇示衆人、或表面正襟、巧言令色、而裏面諂諂嘲笑、遷レ時、其甚者、為二庭園敷衍結構、至二千蕩、盡家産、是於平為二識者之所二擯斥、僅留其形跡、於逸遊者及婦女子間、焉耳。嗚呼、茶道之衰、一至此乎。」

茶聖宗且翁茶禪論曰、愛二奇貨珍寶、一、挾二酒色之精好、一、或結二構茶室、一、甃樹木浴石、一、為二遊樂、設二者、違二茶道之原意、只偏甘、痺味、一、為レ修行、是吾道之本懷也。云々、由之觀之、轉不堪懷嘆也。本会之起、非敢好、事、不レ得、止耳。乃、以二赤心、一、自低明二茶道之本旨、一、以保存國粹、一、外、則示二字内、萬國、内、則成二修身齊家之基礎、一、以欲レ報二國家、一、滿天下同感之士、請來賜レ贊二成本会、一、至嘱々々。

京都東山鷲峰山下於傘亭

主唱者 三徳庵 田中仙樵（「茶道学誌」創刊号より）と

いうものであり、これは、婦女子の遊芸となり、道具茶の遊びに落ちたしまった当時の茶を、宗且の茶禪一味の境地にあらため、その本質をふかめて、日本の国家の将来にも役だてようというのであった。また「茶道改良論」という小論文には「道に弊害あればこれを改良すべく、法衰退し居れば之を挽回せざるべからず、這は謂ふ迄もなく、少しく斯道を窺測するの士は、之を昔時に比して、弊害を生じ且つ衰退せることを認むるべし、果して然らば、即ち之を改良して以て保全の策を講ずるは、実に斯道の為め焦眉の急務なること、更に要せざるべし」（「茶道学誌」創刊号より）という考えをもったが、周囲を見渡して果たしてこれを成しとげてくれる茶人がいるかどうか。宗匠と自称している人でもこの弊害を矯正しようという動きがみられない。これでは茶は衰退していくのみである。茶というものは口を開いて秘伝を言ったり、筆にとって秘伝を書いたりしても決して解るものではないが、現在おこなわれている茶は、利休の伝統の本旨に背いている。だから自分は、その違う方向たきてしまった茶が真の茶だと思われているのは悲しい、故に真の茶というものを天下に知らせたいと思う。そしてその手段として文字を使うのであるという、**「隆盛改善の策を講せんと欲す」**とも述べて、茶道学会の趣意書をおきなっている。

仙樵のこの改革は家元制への批判も含まれている。仙樵は茶を真に学びたいものが集い研鑽する会とし、その元締として会長をおいたのである。そしてその機関雑誌として「茶道学誌」などを発行したのである。会則の第五条にも「本会ノ趣旨ヲ賛成スル者ハ其流義之如何ニ関セズ茶人ト否トヲ問ハズ老若男女悉ク入会セシム」（「茶道学誌」創刊号より）

これらの根本理論の「茶道無流儀論」や「口伝公開」「茶は理論的であれ」をあげていくと、「茶道本来無流儀論」は明治三十一年に茶道学会を創立すると同時に発行した「茶道講義・上」に掲載されている。その一部を引用すると「今人も真実の修業さえ積めば古人と一般なりと豈別あらんや、然る時は後の今を観る事尚ほ今の昔を観るが如しで古人も今人も古人にて、古人は昔時の今人、今人も今時の古人なり、然らば流儀とて決して泥むべからず、只流儀は無きものと悟る可し、其無き所以が即ち流儀の起る所以となり流儀の起るは即ち流儀無き所以なり。看よ元是れ珠光諸人の点前を撰み、七師の台子を定め、又是れを略して草庵の茶の湯に迄至る時は、流儀有べき理なし、其流儀なしと云へば早や是れ無流儀流なり。凡て流儀と云う者あらば万代不易にして、一点の添削出来ぬ筈也。然らば流儀中より流儀生ずべき流儀として、今日伝はるものあるは、流儀あるべき筈なき故に起れる流儀にして、此流儀の起るは即ち流儀なきが故なり。仮りに流儀と云う文字に拘束執着す可からず。」という理論をうちたてた。

また「口伝公開」にはいろいろな手段を投じた。まずその理論は「(前略) 茶道も亦実際の修業に苦辛して、売買にも均しき伝授の遺風は、即け今日の教育法に非ず。試に思へ、學術・技芸・其他百般の事、古来の秘密主義を破って開放主義となれるに非ずや。茶道独り徳川時代の遺風を墨守するは、時世の変遷を店へざる甚しきに属す(後略)」「(茶道講義録第一編より)」というものであり、手段としては、「茶道改良論」でも述べたごとく、筆をとって、雑誌や書物を発行し、秘伝を書いた。また夏期講習会というものを開いた。第一回目は大正四年八月に麻布の祥雲寺境内にある香林院で開

かれた。昭和十二年の第二十三回目から音羽の護国寺の月光殿で昭和十四年まで、さらに人数が増え昭和十五年から昭和十八年までは東京家政学院の講堂で行なわれた。この時から舞台上で点前を見せるようになった。昭和十九年には華道小原流の会館で行なわれたが戦災がはげしくなり一時中止し昭和二十二年から再びはじめ、昭和二十七年まで東京国立博物館の講堂で行なわれ、昭和二十八年から昭和三十五年まで十文字学園の講堂で行なわれた。そして昭和三十五年の十月に仙槌が死んだのち、昭和三十六年から久保講堂で現会長である田中仙翁会長が引き続いて行ない現在にいたっている。このように長く続いた歴史ある講習会であるが、開かれはじめた当時は、雑誌を発行する以上に驚異的であったことは間違いないであろう。衆人環視の面前で台子の奥伝の点前をしたり、茶についての講義を行なった。ここに第三回目(大正六年)に行なわれた内容を紹介してみると

#### ・講義

- 一、茶道の根本主義説明及びその関係
- 一、茶道曲尺割の根本原理とその応用
- 一、点茶術の根本原理とその応用法
- 一、七事式の根本原理とその応用
- 一、茶の湯懷石法とその種類
- 一、茶花に関する説明と花筒製作法
- 一、表具に関する説明
- ・点前
- 一、炉の炭点前
- 一、風炉の炭点前

一、炉、風炉の薄茶点前

一、炉、風炉の濃茶点前

一、表流小習十三ヶ条と裏流十六ヶ条

一、七事式作法

一、台子十二段のうち七段実地公開

○その他

一、茶道と禪学 鈴木子順禪師

一、茶道について 荒川将彦先生

一、香道について 式守嶋手宗匠

一、盆石について 藤井雪峰先生

一、懷石料理法について 宮崎玄城先生

一、香道の実地試演 木全宗儀大人・勝井錦水大人

### 〔茶道の研究〕一七七号より

最後の「茶を理論的に説く」というのは、仙樵の『南方録』の研究及び曲尺割の研究である。この研究は仙樵の茶における根本的理論である。仙樵が『南方録』の研究をするというのは、仙樵の茶道革命にはもってこいの好材料となった。茶の究極を『南方録』にもつていき、その中の秘伝とされている曲尺割を解いていくということとは、仙樵の論説を一つずつ定義つけていくのに大いに役だった。そして、『南方録』を「大日本茶道学会」の基盤とした。故に、仙樵は自ら修得してきた裏流の点前を『南方録』をもとにして改めていき、また裏千家の伝書に加えた。故に、千家で十年しなければできない点前を茶道学会ではその半分の期間で修得することも可能になった。

現在「大日本茶道学会」は仙樵の意志を受けつぎ、より合理的に

大衆的な普及をめざして行なわれている。

それでは、仙樵の曲尺割研究について、とくに注目されるのは、いかなる点であろうか。

### 第三節 田中仙樵の曲尺割研究

田中仙樵の曲尺割研究は、「大日本茶道学会」を創立してから三年のちの明治三十四年の夏からはじまる。浅田妙々斎が仙樵のいる高台寺玉雲におとずれた時からである。そのときの模様を仙樵はつぎのように述べている。

「緒顔白髯、しかも大兵肥満にして一見古武士の風貌あり、今時旅行に持つ小形のトランクの如きものを提げて、其の中から種々な印刷物やら、風呂敷大の紫帛紗など出して見せ千金丹売りのようじやなどと、童顔をニコニコさせて笑われる。（中略）扱て浅田妙々斎は、予に何を云いに來たのか、即ち十八貫のカネの棒を振り回して來たのである。先づ最初の発問がこうである。問『君、茶席には台目量と云うのがあるが知っているか』予は腹の中でこう思うた。

如何に老人なればとて人を馬鹿にするにも程がある。台目量位知らないで大日本茶道学会なる大看板が出せるか、そこで鼻で笑って居た。すると翁は問『一体台目量は何尺のものか』と訊ねた。予は答『四尺七寸二分五厘である』と答へた。（茶道全集―南坊録秘義「曲尺割講義」―より）という問答が続き、ついに「問『君は茶道に曲尺割の法と云うものがある事を知らんな。一体南坊録を読んだ事があるか』答『南坊録は読んでゐる』』といったが、仙樵は千家に伝わる「喫茶南坊録」を借りて写本したが、これには、「墨引」以降は附属していなかった。」さらに浅田が問うたのは『そんなら

台目の事は南坊録にあるじゃないか』である。仙樵も負けずに『南坊録の何所にある』問『君は墨引の巻を読まぬのか』答『読まぬ』問『それじゃ曲尺割の事は知らぬ筈じゃ』という問答がつづいて、妙々斎は仙樵に曲尺割の秘伝を述べ、ついで、野崎兎園を紹介してくれた。これが仙樵が曲尺割を研究したはじめである。そして仙樵も妙々斎をはじめに曲尺割を学んだごとく、『南方録』の転写や兎園の著書である『縦横五則弁』『茶道玉の緒』『茶道古式原理考』などの研究からはじめたのである。

そして、明治四十四年に、野崎兎園から「既に伝うべき伝へ終りたれば、何時瞑目するも安心である」という手紙をもらい、再びおろしていた「大日本茶道学会」の看板をあげたのである。

仙樵のこのような曲尺割研究を追及していくには、明治三十一年に発行した「茶道講義」と、仙樵が茶道学会の看板を再びあげた、明治四十四年に発行した、「茶道講義録」を比べてみるとはつきりする。明治三十一年に発行した「茶道講義」は裏千家で習得したそのまゝを図にしたものである。しかし、明治四十四年に発行した「茶道講義録」は、あきらかに曲尺割を学んだあとであることがはつきりする。

また仙樵は、兎園が著述したところの「茶道玉の緒」・「縦横五則弁」・「茶道古式原理考」を発行し、且つ妙々斎の研究も各雑誌に掲載した。兎園や妙々斎の研究は、弟子であり友人である田中仙樵によって広く世にでたのである。仙樵も自らの研究を「三徳庵隨筆」や「茶道の研究」（以上二つは大日本茶道学会発行）栗田天青発行の「茶と花」後ちの「日本之茶道」（曲尺割の玄理）、佐々木三味発行の「茶道」（喫茶南坊録講義）などに多々発表している。それ

て世間に『南方録』をひろめようと努めた。「予は、南坊録を以て和歌の万葉集に比し、仏典の法華經とも尊信するものなれば、洽く茶人は其茶道の真理を茲に斟み、利休中心主義に統一して、誤れるは是に照らし知らざるは教へられ、以て座右の宝典たらしむるを要す」（『茶道講義録』より）というように、仙樵は『南方録』及び曲尺割を研究するようになってから、仙樵の茶は『南方録』中心になっていた。

そしてその研究の成果として、仙樵は丸盆長盆の点前を創作したのである。

丸盆も長盆も『南方録』の墨引の巻にでてくるもので、丸盆は伝書のはじめに「丸盆にて茶を点つる故実」（丸盆草行真伝書）とあって、「南坊録に曰く、東山御物に唐物の盆六枚有り、月山長盆、趙昌雷盆、常長盆、中丸盆、大丸盆、尺長は盆なり、何れも五十飾を始め、外にも種々次第の飾、真草凡て数を知らず、（中略）右の内、中丸盆と大丸盆は何れも貴重なる道具を取扱う時の盆にして、其の点茶法も至って厳格なるものあり。即ち「西湖家天目の台子には、大丸盆持出す手前あり、又雷盆にては、名物鎌倉茄子と花山天目を台無しに飾られ云々、」（南坊録墨引）と有り。此儀に基づき、中丸盆並びに大丸盆の真行点前を創案す。是れ古き故実を尊重し時世に応じて新しき点茶に応用する所以なり。」（丸盆伝書より）これから中丸盆草、大丸盆行、真の点前ができたのである。

長盆は「長盆台子点前制定の理由」（長盆台子伝書）に真の行台子の時に使用する四方盆だと、中央の陽曲尺に当てようとする陰括りになるので、底部一尺以上の長盆を使用しなくてはならない。伝書に「南坊録墨引の巻」に曰く「惣て能盆ト云へ、台子上段ニカ

ガリテ、其内道具クバリタルニ、カネヨク合タルヲ云也。東山殿ノ六ノ御盆モ、イカホドモ結構ノ盆アリシ中ニテ、一盆々々ニ御道具相応ノ配リテ以テ、尺ノヨキヲ極置シ三事也。大方ハ一盆ノ内ニ、一ツモノト思フ道具ニ色カガル事ハナキ事ナルユヘ、一色一ツモノカガリ、其外ハ三分ノ一ニカザル也。サテコソ月山御盆斗ハ、天目茶入ニ色ヲ一ツモノノカネニアテテカガラレ、其カネニヨク合タルヘ第一ノ御盆ニ定メラレタル也。茶約ハ用カネニ当ル、是ツツキノ根本ナリトカヤ、盆ノ大小ハ銘々道具ニシタガウモ可然ト、体ノ寛書ニアリ、是ハククリテカガリ物ハ、何分ニモ置テ不苦ニヤト体雜談アリシ。猶可考ト云々。」(以下略)そして、この長盆の点前は台子十二伝の中にあるが、「茶入天目の扱い並に曲尺割等疎略なれば、以上利休居士の教えに基き、故実に従い、真行草三段の長盆点前を創案す、是れ南坊録所載の理論を尊重し、久しく埋没したる点前を復古し、永く後世に其作法を伝え遺さんと欲するに外ならず」(「長盆台子伝書」より)故に丸盆と長盆は仙樵が修得してきた裏千家にはない点前である。

以上が仙樵の曲尺割研究の歩みとその独創である。これは現在でも「大日本茶道学会」の基盤となっている。

またこの曲尺割研究は、柴山不言に受けつがれたが、あまりにも難解である故にそのあとに続くものはない。現在において、もっと曲尺割の研究をするものが現われてもよいのではないだろうか。

## 結 論

茶においてはの美学は往々にして道具の取り合わせ、調和の美・侘び・寂びの美については述べられることは多々あるが、その道具の

飾りつけは述べられることは少ない。茶においてどこに何をおくか、茶と茶約を置く場合でも一つ一つ神経が配られて置かれる。とくに台子の場合などはそうである。そしてそのおかれた形がおのづから美しくみえる。それが茶の美を考えるうえでもっとも美しいものであり、また一番大切なことではないであろうか、利休はこの美を曲尺割でもって実現したのである。限られた平面を同じような色彩のもので(利休好みと称せられる道は地味で暗い)美しく安定した飾りつけをしようとするればそれは曲尺割のようなこまかい秘事を作り出す必要があった。西洋においても古くはギリシアの昔から黄金分率が考えだされ、それが絵画における構図の法則となっているごとく、日本においては法則である黄金分率が曲尺割である。黄金分率はキャンパスという平面の上だが、曲尺割は茶室という平面且つ三次元の黄金分率である。この曲尺割における美こそ世界に誇ってよい日本人の美意識の現われである。道具の点が動かす人の手によって定められた規矩から規矩へ動きそれが静止したときにそこには空間の美ができる。そして「忘タル心ノカネハ五ツトモ六ツトモナシニアフゾ妙ナル」とか「五ツ折六ツノ小ワリヲ修業シテ至ルココロノ一ツガネナリ」というような歌のごとくになれば、茶の美は頂点に達するのである。前の歌の「忘レタル心ノカネ」とは、悟った茶人が一つ一つ規矩を考えることなく、自由に曲尺割を定めても法にかなうといった意味の歌で通常「忘レガネ」といわれている。また後の歌の「ココロノ一ツガネ」とはいっさいの規矩を自在に創造する主體的規矩をさしている。

以上のような曲尺割を千家ははじめ各流とも現在使われていない。現在茶道具を置く時は畳の目数だけに頼っている。そして、右の歌

の「忘レガネ」をもち出し、利休は晩年は曲尺を忘れなさいといっている故に曲尺は必要ないとしている。また一般的な茶人は箒庵高橋義雄のごとく「おらが茶の湯は自分の楽しみとして、無造作に之を好むもので、面倒臭い事は大嫌いだ」といつている。これは浅田妙々齋が高橋義雄の所へ曲尺割をときに行った時の言葉である。

仙樵が右の曲尺割を研究している時、野崎兎園・浅田妙々齋・柴山不言以外、曲尺割を研究するものはいなかった。現在もその状態は続いている。だが、仙樵が研究してきた時代には『南方録』は茶の聖典としてその真価はゆるぎないものであった。これは仙樵らが、定義つけたことでもある。しかし現在第一章第二節で述べたごとく『南方録』は偽書であるとし、とくにその中の「墨引」の巻は後世の茶人の創作といわれている。そして現在、『南方録』の内容

# 参考文献

著者	書
○田中 仙樵	「茶道講義」上・中・下
○浅田妙々齋	「妙々茶話集」
○田中 仙樵	「茶道講義録」第二編
○野崎 兎園	「茶道玉の緒」
○田中 仙樵	「南方録秘義曲尺割講義」(茶道全集巻の十三所収)
○田中 仙樵	「茶道講義録」第一編
○堀口 捨己	「利休の茶」(思想二二二号、二二三号、二三五号所収)
○田中 仙樵	「茶道訓」
○岡部 香塙	「茶人大系譜」(点茶宝鑑)所収)
○桑田 忠親	「千利休」

ではなく、その史料批判にのみとどまっている。しかし、その史料的に偽書であっても、その内容が否定されていない。とくに曲尺割の理論は仙樵以下三人が解明した他はいないということは、曲尺割というものが非常に難解なものだからであろう。

現在の史料批判は表面のみにとどまっており、その批判は実山からはじまっている。しかし、明治大正の間に仙樵のように『南方録』を一生研究したものがいるのであるから、逆に、彼らの研究をもとに、内容的な批判にはいくべきである。それでなくして、『南方録』の研究はいきづまりがくることは確かである。また内容的な面からみていくと、野崎兎園・浅田妙々齋・田中仙樵・柴山不言達の研究及びその著書は重要な資料となりうるであろう。

発行年月日	発行所
明三十一年十一月十五日	大日本茶道学会本部
明三十四年十二月二十四日	大日本茶道学会本部
大七十年十月三日	大日本茶道学会本部
大十年	大日本茶道学会本部
昭十年	創元社
昭十五年七月二十五日	大日本茶道学会出版部
昭十六年	岩波書店
昭十六年三月二十日	大日本茶道学会出版部
昭十六年一月五日四版	鈴木書店
昭十七年	創元社



- 西堀 一三
- 末 宗広
- 小宮 豊隆
- 田中仙翁編
- 熊倉 功夫
- 数江 教一
- 西山松之助
- 久松 真一
- 永島福太郎
- 藤 直幹
- 江守奈比古

「南坊録の研究」  
「茶人系譜」  
「南方録の真偽」(「茶と利休」所収)  
「茶と人」(「三徳庵茶話」)  
「近代茶湯研究史序説」(「伝統と現代」第十卷茶と香所収)  
「対照の美とカネワリの法」(「図説茶道大系」茶の美学」所収)  
「南坊録は偽書か」(「図説茶道大系」茶の文化史」所収)  
「本篇南方録」(茶道古典全集第四卷所収)  
「茶の古典」(茶の湯ライブラリー所収)  
「茶の湯一会集」(茶道古典全集第十卷所収)  
「お茶の話」(茶人のわびとさび)

昭和二十一年三月二十日  
昭和二十五年十二月二十五日  
昭和三十一年  
昭和四十三年八月二十日第三刷  
昭和四十四年七月二十五日  
昭和四十五年三月三十日第五版  
昭和四十五年三月三十日第八版  
昭和四十二年十二月一日  
昭和四十四年五月二十九日  
昭和四十二年十二月一日

宝雲舎  
河原書店  
角川書店  
木耳社  
学芸書林  
角川書店  
角川書店  
淡交新社  
淡交社  
淡交新社  
海南書房

雑誌

雑誌名

論文名

発行年

○茶道雑誌

茶道改良論

明治三十三年

大日本茶道学会設立旨趣書

野崎兎園師の書簡

妙々斎浅田翁の書簡

浅田妙々斎の書簡

浅田抄々斎

前田瑞雪翁の想い出

柴山不言翁の思い出

前田瑞雪翁伝

野崎兎園翁入門の事

立花実山の事ども

○日本之茶道

○茶道

二号

○茶道一号

○茶道雑誌

利休の美学

資料

○茶道の研究

南坊録随想

三徳庵随筆

利休の美学

○「喫茶南方録」書院台子墨引(寺田本「貞」)今日庵文庫蔵

○「丸盆草行真伝書」昭和四十三年八月一日大日本茶道学会発行

○「長盆台子伝書」昭和四十四年五月十五日大日本茶道学会発行